

構成的グループ・エンカウンターが既知集団の集団構造とメンバーの心理的変数に与える影響[†]

松尾 和美*

秋田大学教育文化学部非常勤講師

清水 貴裕**

秋田大学教育文化学部

本研究では、既知集団に対して構成的グループエンカウンター（SGE）を実施し、SGEがメンバー個人の心理的変数と集団の構造に与える影響を検討した。SGE前後において、メンバーに対する熟知度と自己統制尺度（中田，2000）への回答を求めた。熟知度に関するデータはソシオプロフィール法を用いて分析し、数量的な分析に加えて、集団構造を視覚的に捉えることを試みた。SGE実施後、自己統制尺度の下位尺度のうち、自己開示得点、独自性得点、自己主張得点、許容性得点が有意に上昇した。また、メンバー間の対人距離も有意に縮まった。さらに、集団構造の変化を検討するために、個人の心理的変数とその変化を要因とする分析をおこなった。その結果、独自性と自己開示の側面においてそれらと集団構造に有意な関係が認められた。すなわち、独自性得点が増加した参加者は中心的なメンバーになり、集団内に自分のポジションを得、自己開示得点が低下した参加者の集団内配置は遠心的に推移したことを見出した。本研究の結果から、SGEは既知集団の集団構造やメンバーの心理的特性に対して開発的・改善的に作用することが示された。一方で、既知集団に対するSGEならではの難しさや考慮しなければならない点も示唆された。

キーワード：構成的グループ・エンカウンター、集団構造、自己開示、ソシオプロフィール法

問題と目的

構成的グループ・エンカウンター（Structured Group Encounter, 以後SGE）は、エンカウンター・グループの一形態であるが、Rogersなどの流れを汲むベーシック・エンカウンター・グループ（以後

BEG）とは異なり、事前に計画されたエクササイズ（集団内相互作用を促進するための課題）を通して展開されていくのが特徴的である（水野，2009）。そのためSEGはBEGと比べて心的外傷を予防しやすい（國分，1992）とされる。SGEは主に教育現場で実践および研究が多数なされてきており、さまざまな観点からの研究報告がある。

そうしたSGEの効果に関する研究は大きく集団成員個人々の心理的特性に及ぼす効果と、集団に及ぼす効果に関するものに大別できる。個人の心理的特性に及ぼす効果についての検討は古くから行われている。最近では、例えば高田・坂田（2008）は看護学生を対象にSGEを実施し、自己信頼、自己開示、

2010年2月18日受理

[†]Influence of Structured Group Encounter on a Structure of Familiar Group and Their Psychological Variables

*Kazumi MATSUO, Part-time lecturer at Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

**Takahiro SHIMIZU, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

アサーション、共感性、セルフエスティームに与える影響を測定している。その結果、看護大学生では、SGE実施後に自己信頼、自己開示、受容性、断る力、対決、セルフエスティームの尺度得点が上昇することを見いだしている。また、武蔵・河村（2009）は、大学生を対象にSGEを実施し、アイデンティティ・ステータスに及ぼす影響を検討している。

またエンカウンター・グループの効果は、個人の心理的特性に対するものだけではなく、坂中・村山（1993）が、「人と理解し合い、親密な人間関係を持ち、人間としての孤独感を人間の中で癒していこうとする方向性が維持されている。また、人が自分に近づきやすくなったり、触れてくるようになる」と指摘するように、対人関係における変化も特徴の一つとしてあげられる。例えば坂本・藤野・大塚・石橋・森本（2006）は、看護大学生を対象にSGEを実施し、参加直後とフォローアップ時の感想から、SGEによる自己理解や他者理解の深まりが新しい人間関係の形成につながる可能性について示唆している。こうした対人関係における認知の変容が集団そのものに及ぼす影響についても検討されており、例えば河村（2001）は小学5年生を対象に年間を通してSGEを実施し、スクール・モラル尺度とソシオメトリック・テストを測定している。その結果、スクール・モラルの学級平均値や4月時点でスクール・モラル得点や社会的地位が低かった児童の得点が上昇しており、児童間のリレーションの形成を促進させる可能性を示唆している。また、小野寺・河村（2005）も中学生を対象にショートエクササイズによる継続的なSGEにより、学級生活への満足感が高まることを示唆している。

こうした集団に対する効果は検討されてきているものの、片野・吉田（1989）が指摘するように、BEGに比較して、SGEでは人間関係のプロセスに焦点をあてた研究が少ない。BEGとSGEは手法の違いはもとより、SGEは主に教育現場で使用されることから、クラス単位の既知集団に対して実施されることが多い点もBEGと異なる点であり、そうした観点からもSGE独自の人間関係に焦点をあてた研究が求められる。

そうした中で、福井（2008）は集団のリレーションそのものの変化に焦点をあて、高校生、中学生を対象に、自分を含む学級内の成員間全ての組み合わせについて心理的距離を一对比較し、多次元尺度構

成法を用いて検討している。その結果、SGEを実施することによって心理的距離が減少し、リレーションづくりが促進されていることが示唆された。しかしこの研究では、著者自身が指摘しているように、一对比較法を用いたことで参加者への負担が大きくなり、また異性間の関係などよくわからない関係の評定も含むため、回答がよい加減になる参加者も少なくなく、結果が歪む可能性が高い。また、リレーションの変化に焦点を絞った研究であるため、個人の心理的变化とリレーションの変化の関連については明らかにされていない。そこで、本研究では、参加者間の心理的距離に加えて、参加者の心理的変数を測定し、個人内の心理的特性の変化がメンバー間の心理的距離の変化に及ぼす影響を検討することを目的とする。

本研究では、個人内の心理的変数として、自己統制を用いる。自己統制とは、「自己の意志に基づき、自らの行動を調整していこうとする行動であり、社会的関係の基本となるもの」である（中田・塩見、1997）。自己統制は対人関係を促し、社会性の発達の指標ともされてきており（中田、1999）、対人関係の形成において重要な役割を果たすものと考えられる。この自己統制に関して、古好・塩見・中田（2000）は尺度を作成し、大学生の自己統制の低位構造を検討している。その結果、「自己開示」「自律性」「愛他性」「許容性」「独自性」「同調性」「自己主張」の7因子構造であることを明らかにしている。また塩見・古好・中田（2000）は自己統制尺度と対人不安の関連について検討し、対人不安高群の方が「同調性」得点が高く、「独自性」得点が低いことを見いだしている。

下位尺度からもわかるように、自己統制尺度は自己開示やアサーションなど、これまでのSGE研究の中でも使用されてきた対人関係を規定する心理特性を含んだ包括的な尺度であり、幅広く心理特性と心理的距離の関係をみるのが可能であることから本研究で用いることとした。

方法

1. 対象

看護系専門学校2年生44名(男性2名,女性42名)。

2. SGEの内容と手続き

①SGEの目的

事前に、当該クラスの担当教員と今回のSGEへ

のニーズを話し合った。現在、クラス内に小規模で他より人間関係が密な「仲間集団」が多く形成され、その集団が固定され集団間の交流が少ない状態であること、そこで、クラス全体としての凝集性や志気が高めることがあげられた。そうしたニーズに対して、メンバーが協力して目標を達成するようなエクササイズを多く取り入れ、メンバー間のリレーションを高めることに焦点をあてたプログラムを作成した(付表1)。

②グループ構成

クラスを5つの小グループに分け、各グループはメンバー8～9名と1名のリーダーによって構成された。グループメンバーは、セッション1のエクササイズの中で決定した。

③リーダー

リーダーは第二著者がつとめ、コ・リーダーとして、第一著者を含む4名がつとめた。5名の臨床心理相談の経験は2年～5年であった。また、専門学校の教員2名が同行し、エクササイズの内容によってはメンバーとともに活動に参加した。

④物理的構成

授業の一環として組まれたグループ体験学習で、学生は全員の参加が求められた。1泊2日の日程で、学校外の施設において合宿形式で実施された。

3. 調査の内容と手続き

クラスの集団構造および個人の心理的変数を測定するために、下記の質問紙を実施した。

①メンバーに対する熟知度：クラス内の全メンバーについて、相手をどの程度知っているかを尋ねた。「非常によく知っている」から「全く知らない」までの5段階で評定させた。

②自己統制尺度(中田, 2000)：自己開示, 自律性, 愛他性, 許容性, 独自性, 同調性, 自己主張の7下位尺度からなる(63項目, 6件法)。

調査は、SGE実施前後に2回行った(プレ調査, ポスト調査)。いずれも合宿とは別の日時に学校でクラス担任によって行なわれた。ポスト調査は、SGE終了後3日目(直近の登校日)に実施され、メンバーは実施日にSGEへの感想の提出が求められた。

4. 結果の処理

クラス集団の構造をとらえるために、クラスメンバーに対する熟知度のデータをソシオプロフィール法(藤本, 2004)に基づき処理した。

この手法では、まず、各メンバーの二者関係ごと

に対人距離を算出する。対人距離のRangeは0-8で、集団の親密さが増すにつれて漸進的に減少する。

次に、前述の処理で得られた対人距離行列に対して多次元尺度構成法を行い、各メンバーの2次元座標を特定する。この座標をもとにメンバーを平面上に図示したものを集団プロフィールという。集団プロフィールの中心は集団の中心を表すため、すべてのメンバーと親密な関係を形成している者(中心メンバー)は中心の近くに位置し、誰とも親密でない者(周辺メンバー)は中心から離れたところに位置する。また、特定のメンバーと排他的な関係を築いている者たちは、仲の良いメンバー同士固まって位置する。このことから、ソシオプロフィール法を用いることで、集団の構造を視覚的・直感的にとらえることが可能となる。

最後に、集団プロフィールの2次元平面上のメンバーの座標と中心との距離を「中心との距離」と呼び、中心との距離が小さい者は中心メンバーであることを表す。その平均値は集団凝集性をあらわすとされ、親密な集団ほど小さい値をとる。

以下の分析では、これらの4つの変数を集団構造を表す指標として用いた。

結果と考察

1. 心理的変数について

自己統制尺度の7下位尺度ごとに合計得点を算出し、プレ調査とポスト調査の平均値と標準偏差を示した(表1)。調査時期を独立変数とし、各下位尺度得点を従属変数とした t 検定の結果、自己開示($t(43) = -3.61, p < .001$)、許容性($t(43) = -2.74, p < .01$)、独自性($t(43) = -2.39, p < .05$)、自己主張($t(43) = -2.95, p < .01$)において、SGE前後の得点に有意な差が認められた。いずれの尺度においても、プレ調査よりもポスト調査において得点が上昇し、ポジティブな方向での得点の変化であった。一方、自律性、愛他性、同調性には有意差は認められなかった。

今回のSGEでは、他者と協力する体験に重点をおいたプログラムを構成し、特に協力の過程でメンバーが共同模索するプロセスを重視した。そのプロセスでは、自分の意見を述べたり、グループ内の意見を調整したり、他者の意見や自他の違いを尊重することが求められる。そうした活動で求められる特性において得点の上昇が認められたことから、今回SGE

で実施したエクササイズがクラス集団の各個人に対して効果的に作用したことが確認されたといえよう。

表1 SGE実施前後の自己統制尺度の平均値（標準偏差）

	pre	post	t値
自己開示	22.6 (4.53)	24.1 (4.65)	-3.61 ***
自律性	38.4 (4.06)	37.7 (4.02)	1.58 ns
愛他性	35.9 (4.01)	36.4 (4.02)	-1.27 ns
許容性	27.4 (3.45)	28.5 (3.09)	-2.74 **
独自性	27.7 (4.19)	28.8 (3.95)	-2.39 *
同調性	36.2 (6.06)	35.8 (5.65)	0.65 ns
自己主張	30.9 (5.39)	32.1 (5.02)	-2.95 **

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

2. クラスの集団構造について

44人集団で組み合わせられる946対の二者関係における対人距離について、SGE実施前後の平均値と標準偏差を求めた(表2)。対人距離を比較した結果、有意な差が認められた ($t(945) = 25.30, p < .001$)。集団凝集性についての検討では、SGE実施前後において有意差はなかった ($t(43) = .07, ns$)。

次に、対人距離及び集団凝集性から得られた結果について、SGE前後の集団プロフィールにより視覚的に検討した(図1, 2)。プレ調査時の布置では、中点付近に位置するメンバーが少なく、また、いくつかの小規模の集団が存在した。特定の親密な仲間集団ができており、その集団同士の橋渡し役となるメンバーがいないことが推察される。ポスト調査時の集団プロフィールでは、平面の中点近くに位置する中心メンバーがあらわれ、かつメンバーが平面上に一様に布置し小集団が少なくなった。

これらの結果をあわせて考えると、座標平面上のメンバー布置の範囲に変化がなかったことが、集団凝集性における有意な変化が認められなかったことと関連していると考えられる。一方、プレ調査時には小集団が複数存在し、各小集団間に距離があることが、対人距離の大きさに反映していたと考えられる。SGE実施後においては均等なばらつきになったことから、メンバー全体としての対人距離が縮小したと考えられる。

3. 集団構造と自己統制の変化との関連

最後に、SGE前後の集団構造の変化と自己統制の変化との関連を検討した。

表2 SGE実施前後の各集団構造指標の平均値（標準偏差）

	pre	post	t値
対人距離	3.90 (1.06)	3.19 (0.80)	25.3 ***
集団凝集性	1.35 (0.43)	1.34 (0.45)	0.07 ns

$p < .001$ ***

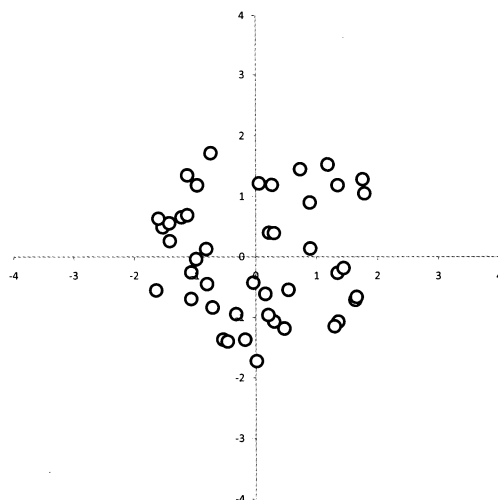


図1 SGE実施前の集団プロフィール

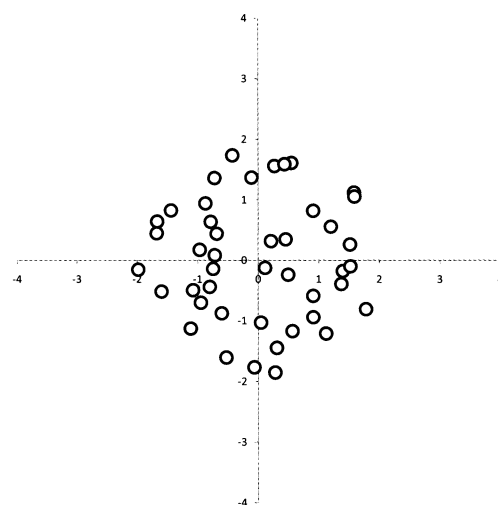


図2 SGE実施後の集団プロフィール

まず、自己統制の各下位尺度の得点ごとに、プレ調査とポスト調査の得点を比較し、得点が増加した対象者を上昇群、低下あるいは変わらなかった対象者を低下・不変群とした。さらに、SGE前の心理的

特性を考慮するために、プレ調査時の自己統制尺度の各下位尺度得点の平均値によりHigh群、Low群に分けた。ここに調査時期の要因も加え、「中点との距離」を従属変数とする、2(変化:上昇群/低下・不変群)×2(心理的特性:High群/Low群)×2(調査時期:プレ/ポスト)の3要因分散分析を行った。

その結果、独自性と自己開示の側面においてのみ、有意な結果が得られた。

独自性についての分散分析の結果、2次の交互作用が有意であった($F(1,40) = 4.13, p < .05$) (表3, 図3)。単純交互作用の検定を行ったところ、High群において、変化と調査時期の交互作用が有意であった($F(1,40) = 8.45, p < .01$)。単純・単純主効果の検定を行ったところ、High群のポスト調査時における、変化の主効果が有意であった($F(1,80) = 4.34, p < .05$)。また、High群における上昇群における調査時期の主効果が有意であった($F(1,40) = 5.81, p < .05$)。すなわち、独自性が高くかつSGEによって独自性がより高まった対象者は、中点からの距離が小さくなった。上記の分析を集団プロフィールに図示した(図4, 5)。プレ調査時、上昇-High群にあたる多くの者はメンバーの誰かと近接し、2~3人の小集団を形成している傾向が認められた。SGE実施後においては、そのような傾向はみられなくなった。

今回のグループ体験は、人と同じでなくていいという志向をもっていた対象者にとって、より自他の違いを認識し、自分らしさを意識する体験となったのではないだろうか。さらにメンバーにとっても、クラスメートの異質性の発見・受容をするプロセスの体験ともなり、メンバーに“いつも特定の人と一緒にいる個人”ではなく、個として認知されることにつながったと考えられる。こういった彼らの変化は、小集団が林立するというすでに形成されていた構造に動きを与えることにつながり得ることが示唆された。

表3 SGE実施前後の独自性における集団構造指標の平均値(標準偏差)

変化	特性	N	調査時期	
			pre	post
上昇群	High群	9	1.41 (0.37)	1.06 (0.38)
	Low群	18	1.39 (0.49)	1.40 (0.44)
低下・不変群	High群	11	1.23 (0.37)	1.48 (0.47)
	Low群	6	1.32 (0.35)	1.34 (0.29)

次に自己開示については、得点変化と調査時期の1次の交互作用が有意であった($F(1,40) = 6.94, p < .05$)。(表4, 図6)。単純主効果の検定では、ポスト調査における変化の要因の主効果が有意であった($F(1,80) = 4.19, p < .05$)。また、自己開示低下・

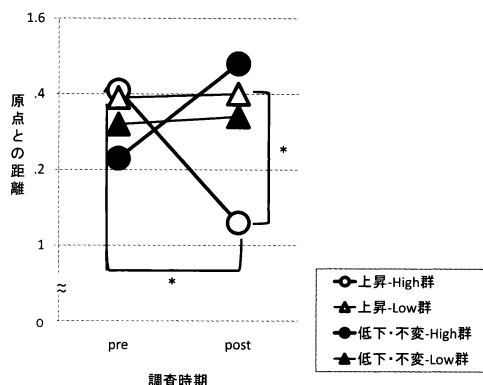


図3 独自性の変化による集団構造指標の変化

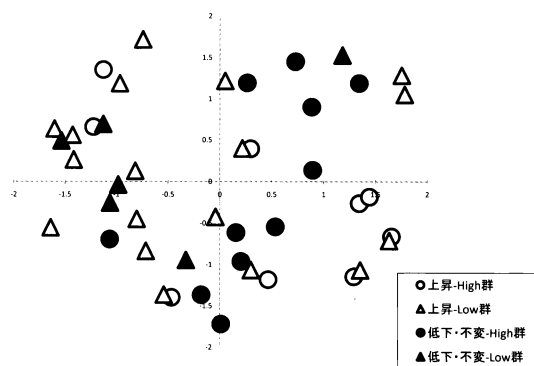


図4 独自性の変化による集団プロフィール (Pre)

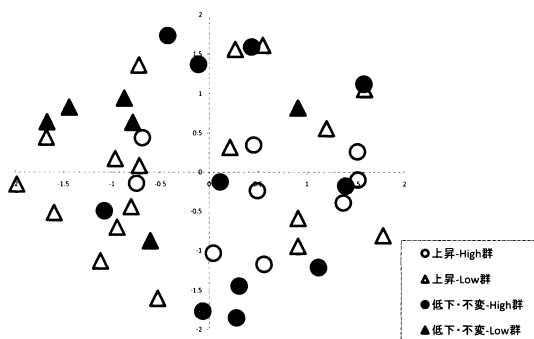


図5 独自性の観点の変化による集団プロフィール (Post)

不変群における調査時期の主効果が有意であった ($F(1,40) = 5.94, p < .05$)。SGE実施前後において自己開示得点が低下した対象者は、中点からの距離が増大した。上記の分析を集団プロフィールに示した(図7, 8)。High群, Low群ともに自己開示得点が低下・不変であった対象者は、SGE前後において遠心的に推移したものが多く認められ、ポスト調査時のプロフィールでは中点から遠い距離に位置した。一方で、SGE実施後の中心メンバーには自己開示得点が上昇した対象者である傾向が認められた。

自己開示を伴う関わりは、メンバー相互のリレーションを高める働きを果たすことが示された。さらに、このことは集団全体の構造の変化を促進させる要因となっていると考えられる。一方で、自己開示を伴うような他者とのふれあい体験は、自己開示への抵抗が高めることがあるという結果も認められた。ここで考えなければならない問題は、グループ・エンカウンターにおける「心理的安全性の保証(坂中, 2005)」であろう。第1に、今回のように研修型SGEは、本人の自由意志による参加とは異なり、SGE時の個人の心理状態やモチベーションにかか

表 4 SGE実施前後の自己開示における集団構造指標の平均値(標準偏差)

変化	特性	N	調査時期	
			pre	post
上昇群	High群	14	1.39 (0.45)	1.24 (0.49)
	Low群	15	1.37 (0.40)	1.24 (0.45)
低下・不変群	High群	7	1.22 (0.42)	1.59 (0.18)
	Low群	8	1.35 (0.43)	1.48 (0.39)

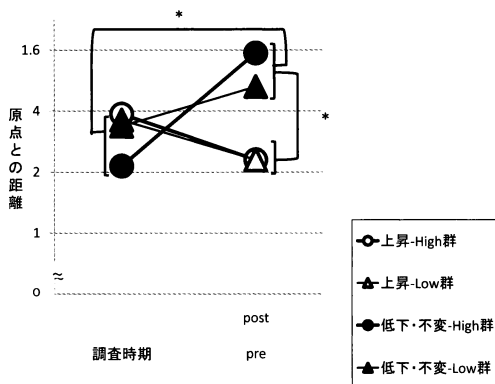


図 6 自己開示の変化による集団構造指標の変化

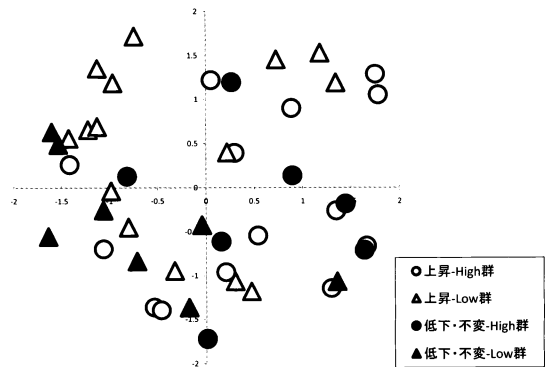


図 7 自己開示の変化による集団プロフィール (Pre)

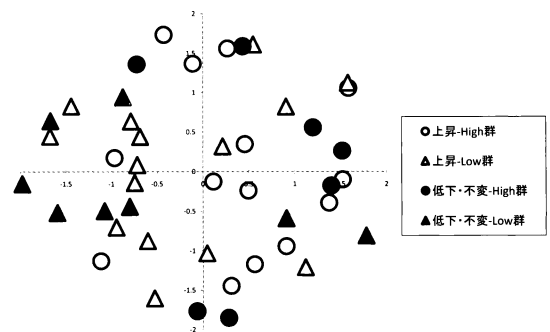


図 8 自己開示の変化による集団プロフィール (Post)

わらず参加することが求められる。第2に、今回のSGEは、学級という既知集団において行われたため、参加者はSGE終了後も関係が継続される集団であるという点である。“不用意に開示しすぎた感覚”への対処として本人が集団から撤退したか、あるいは、メンバーのことが“はからずも見えすぎてしまった感覚”からの周囲が距離をとったのではないかと考えられる。

総合的考察と今後の課題

本研究では、カリキュラムの一環として行われた既知集団に対する研修型SGEが集団構造に与える影響を検討した。

先行研究に見られるように、SGEが自己開示や独自性といった個人の心理的変数に影響を持つことが示された。それに加えて、クラス集団の集団構造の変化を促進することが示された。参加者は2年生で、すでにメンバー内には関係ができていたが、SGE実施前後を比較すると、個々のメンバー間の二者関

係の距離の減少が認められた。SGEのエクササイズという非日常の活動の中で、ふだんの学生生活では見られないメンバーの側面を見たり、見せたりすることが「その人らしさ」との出会いとなり、規模の小さな仲間集団で硬直化していたクラスの集団構造を変化させる一助となったと考えられる。これは、既知で、関係のできている集団、特に、学級集団などにおけるSGEの有効性を示唆すると考えられる。

ここで、今後の課題が2点挙げられる。

第1点として、本研究では数量データの統計的検討だけではなく、各メンバーの集団内位置や集団構造の推移を検討に加えることで、グループ・エンカウンターにおける「深めない工夫、ふれあいと自己発見を促進しない工夫(坂中, 2005)」の重要性が確認された。今回、自己理解や自己表現をねらいとしたエクササイズでは、深い自己開示になりすぎないように工夫を加えた。しかしながら、一部の学生においては侵襲度が高かったことが推察され、なお一層の配慮が必要であったと考えられる。今後、エクササイズ内容、プログラム面での工夫だけでなく、エクササイズに乗りにくい対象者に対する個別の対応を検討も求められる。

第2点の課題として、SGEの長期的な影響の検討である。フォローアップ調査を実施することにより、新たなりレーションが経験されたことがその後の学習活動や学校生活にどのような影響をもち得るか、また日常の活動を積み重ねるでSGEでの集団構造の変化がどのように変わっていくのかを検討することが求められる。

最後に、今回のSGEがクラス全体の凝集性を目的としたため、分析においてもクラス全体を対象とした。SGEにおける小グループ内での集団構造の推移を詳細に分析し、さらにメンバーの感想を質的な分析を加えることで、SGE内での人間関係プロセスを検討したい。

引用文献

藤本 学 2004 ソシオプロフィール法-関係性の親密さから見る小集団の構造 対人社会心理学研究 **4**, 77-85.
 福井義一 2008 学校現場における短期間の構成的グループエンカウターの効果測定に関する研究 - 多次元尺度構成法 (MDS) による心理的距離

の視覚化を用いて 東海学院大学紀要 **2**, 161-172.
 古好貴智・塩見邦雄・中田 栄 2000 大学生の自己統制に関する研究 1: 自己統制の下位尺度の構造とZKPQ性格検査との関連について 日本教育心理学会総会発表論文集 **42**, 136.

片野智治・吉田隆江 1989 大学生の構成的エンカウンター・グループにおける人間関係プロセスに関する一研究 カウンセリング研究 **21**(2), p150-160.

河村茂雄 2001 構成的グループ・エンカウンターを導入した学級経営が学級の児童のスクール・モラルに与える効果の研究 カウンセリング研究 **34**(2), 153-159.

國分康孝(編) 1992 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房.

水野邦夫 2009 学生集団に対する継続型構成的グループ・エンカウターの実施が自己概念の変化に及ぼす効果について: 看護系専門学校における実践をもとに 帝塚山大学心理福祉学部紀要 **5**, 113-123.

武蔵由佳・河村茂雄 2009 アイデンティティ形成を促進するための心理教育的援助-構成的グループ・エンカウターの実践から カウンセリング研究 **42**(1), 11-21.

中田 栄・塩見邦雄 1997 児童期における自己統制の発達とその規定要因の検討: 自己統制と自己効力感との関連 日本教育心理学会総会発表論文集 **39**, 37.

中田 栄 1999 自己統制の研究の課題と今後の展望 応用教育心理学研究 **15**(2) 3-10.

中田 栄 2000 向社会的行動における自己統制の役割とその規定要因の検討 風間書房.

小野寺正己・河村茂雄 2005 ショートエクササイズによる継続的な構成的グループ・エンカウンターが学級適応に与える効果 カウンセリング研究 **38**(1), 33-43.

坂本洋子・藤野ユリ子・大塚邦子・石橋通江・森本淳子 2006 「人間関係論演習」における構成的グループ・エンカウターの有効性の検討 日本赤十字九州国際看護大学intramural research report **5**, 1-9

坂中正義・村山正治 1993 日本におけるエンカウンターグループ研究の展望 教育学部紀要, 教育心理学部門 **38**, 299-309

坂中正義 2005 構成的エンカウンター・グループにおける心理的安全感を重視したファシリテーション「深めない工夫」と「プロセス的視点」教育実践研究 13, 111-120

塩見邦雄・古好貴智・中田 栄 2000 大学生の自己統制に関する研究(2):自己統制と対人不安尺度の関連 日本教育心理学会総会発表論文集, 137

高田ゆり子・坂田由美子 2008 看護学生を対象とした構成的グループ・エンカウターの効果 カウンセリング研究 41(1), 44-52

Summary

The purpose of this study was to investigate how Structured Group Encounter (SGE) affect individuals' psychological change and group structure of familiar group. Forty-four nursing school students participated in the study. All participants had SGE session. Self-regulation scales and rate familiarity about each class of member were assessed at before SGE session and after SEG session. The familiarity data were analyzed using the Socioprofile method. One of the Socioprofile-indexes was the group-profile, which was created multidimensional scaling (MDS) plots from interpersonal distance data in order to visualize of

the group structure in class-member. At after SEG session, subscales score of the self-regulation scale -such as self-disclosure, uniqueness, assertiveness and permissiveness- were increased significantly. Also, the interpersonal distances among each member significantly decreased. Additional analyses showed that significant associations between individuals' psychological changes and their group structure. According to the group-profile, participants who rose uniqueness scores made independent member and positioned as core members of the class. On the other hand, participants who decreased the self-disclosure scores fell away from class member.

In conclusion, the result revealed that SGE was useful in developing and improving the group structure among familiar group and individuals' psychological variables. It is, however, discussed difficulties and consideration points on SGE for familiar group.

Key words : Structured Group Encounter, group structure, group, self-disclosure, the Socioprofile method

(Received February 18, 2010)

付表1 エンカウンター・プログラム

セッション	ねらい	エクササイズ	活動の概要と今回の適用の工夫
1 (30分)	SGEについての説明	入講式 オリエンテーション	グループ・エンカウンターでのルールやスタッフの紹介を行う。
2 (80分)	SGE参加への不安や緊張の低減 出会い	この指とまれ じゃんけんボーリング アドジャン エンカウンターネームの命名	アイスブレイキングを目的とし、身体的な活動を伴うエクササイズを中心とした。偶然性によるグループ編成をすることで、ベアリング(仲の良いメンバーが同じグループになる)を避け、新たな人間関係への抵抗を低減する。
3 (90分)	リレーション育成のきっかけづくり 仲間意識の向上 他者と協力する体験	魔法のじゅうたん クリスマスツリー 10人11脚	小グループごとに競う形式にし、「作戦タイム」「練習タイム」をとることで、小グループ内のメンバー同士で共同模索のプロセスを重視した。
4 (90分)	自己理解 自己発見	進化じゃんけん 四面鏡	他者からのフィードバックによる自己理解、自己表現の活動を、まずリレーションが形成されてきた小グループ内で行ったのち、全体で行うといったように段階をもたせた。
5 (90分)	自己理解 自己表現	古今東西ゲーム 変形マジカルバナナ 人間かるた	同上
6 (80分)	他者信頼	瞑想 トラストフォール ブラインドウォーク	小グループではない2者関係における緊密な信頼関係を体験する。
7 (80分)	集団の信頼関係の深化 一体感の体験	手つなぎオニ 魔法のいす	全体活動の前に小グループでの活動を行い、そこで出された意見を全体にフィードバックし、クラス全体でのどう協力すればよいかを模索した。
8 (90分)	自己・他者の受容 SGE全体のふりかえり	別れの花束 終講式	メンバーからの言葉を受けた後、自分の気持ちを表現する時間を長めにとり、双方向性のやりとりにした。